豊田っ子

学校だより　第７号
令和７年　１１月
富山市立豊田小学校

読書の秋

校　長　　吉野　哲

猛暑といわれた夏が過ぎ、最近では朝晩冷え込む季節となりました。日本ではよく「〇〇の秋」と言われますが、皆さんはどのような秋を思い浮かべるでしょうか。今回は一冊の絵本を紹介したいと思います。その本は私が先輩の先生から教えていただいた絵本で、私自身が子供を理解する際の拠り所になったともいえる絵本です。

「おこだでませんように」　くすのきしげのり

題名の「おこだでませんように」というのは「おこられませんように」という意味です。主人公の「ぼく」は小学校１年生の関西人。母親や先生にいつも怒られています。よかれと思ってやったことが誤解されて、毎日怒られてばっかりという生活を送っています。本当は「ええ子やねえ」と褒められたいのに、何をやってもうまくいきません。そして７月７日に七夕のお願いを短冊に書きます。「おこだでませんように」と一文字一文字気持ちを込めて書きます。書き終わるのがクラスで一番遅かったため、また怒られると思っていると、担任の先生はその短冊を見て涙を流しながら「おこってばっかりやったんやね。・・・ごめんね。ようかけたねえ。ほんまに、ええお願いやねえ。」と褒めてくれました。その後、先生はお母さんと連絡を取り合い、「ぼく」を褒めるようにし「ぼく」の願いが叶うという内容です。この絵本からは様々なことを感じることができます。

・普段怒られてばかりいる子供は、自分のことをだめな子と思い始める。
・家庭でも学校でも怒られていても、内心は褒められたいと思っている。
・怒られることを気にしすぎるようになり、どうしていいか分からなくなる。
・第三者から見て怒られるような行為にも、そこに至るまでには理由がある。
・先生と保護者が連絡を密にすることは、子供にとって幸せなことである。
・褒められることで、大人と心が通じ合う時間が生まれる。
・子供の健やかな成長のためには、温かく子供を見守ることが大切である。

などです。もしかしたら、もっと多くの視点があるかもしれません。機会があれば一度手に取ってみてくだされば幸いです。